要するに、屏風岩攻略の可能性は、既存の戦術の中からは生まれなかったのである。

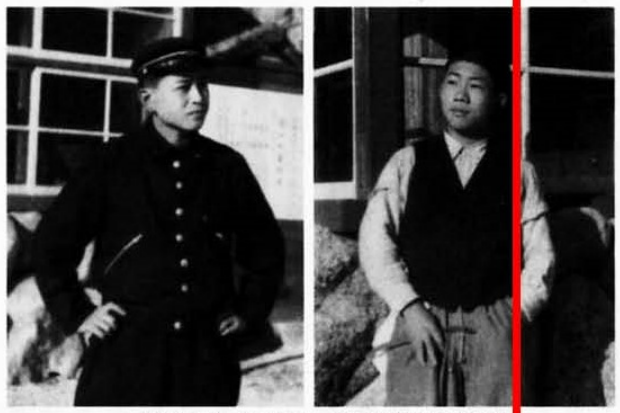
私は迷いの雲からぬけ出ることができた。同時に伊藤と私のパーティは、最終的に破局を迎えたのである。

いまや屏風岩の攻略は少年の未知の力にかかっているが、そのパーティにも重大な欠陥があった。これまでの登攀でつねに叱りつけていた私が、ザイルのトップの座から降り、屏風岩攻撃参加の熱心な希望者の中から選び出した者をザイルのトップに立てるということは、彼らの闘争心をいやがうえにも高め、実力以上の仕事ができるという期待は大きいが、その反面、昨年秋の攻撃の時に指摘したような危険が潜んでいる。それをできるだけ防止するために、あらかじめこの危険があることを彼らにとくと注意し、彼らの自重を強く要望するとともに、私自身パーティの安全に関しいっそうの責任を感じ、万全を期すべく心に誓ったのであった。そうとはいうものの、リーダーに登攀能力がないために、少年をトップに立たせるという登り方には、きびしい批判があろう。私は投げ縄同様、この点でもいかなる批難も甘受する覚悟である。

私は、目前にせまった闘いにあせりを感じながら、少年を含むパーティの編成を具体的に考えた。

まずパーティの数は、生徒二名に私を加えて三名とした。生徒を一名とせず二名としたのは、トップの仕事を軽減するためと、先生と生徒一対一では気持が重かろうと考えたこと、さらに生徒を二名とすれば彼らが互いに励ましあい、未知の力をいっそう高めるのではないかと考えたからである。

私自身の経験からすれば、パーティを三名にしたことはまったく異例で、これまで困難を予想される仕事にたいしては、ことごとく二名で向かったものである。三名は二名に比し、約二倍の時間を要



屏風岩アタックメンバーの松田（左）と本田（右）

するというのが常識である。しかし私は、分業と未知の力の高揚という新しい戦術を確実ならしめるため、生徒二名としたのであった。けっきょく昨年度（昭和二十一年度）のリーダー本田と、本年度のリーダーの松田を同行することにした。

母校に背を向けて

パーティの編成を含め、すべての問題が解決した。私は、投げ縄、分業作戦、若さの力それに運動神経と投てき力抜群の松田を擁して、心おきなく屏風岩との決戦に臨むことができる。このパーティの登攀力は、伊藤、私のパーティに比して、もはや格段の違いがあることは疑いなかった

私は一週間後にせまった出発のため、登攀器具、食糧などの整備・調達に忙しい日々を送っていた。ちょうどこの頃、伊藤から手紙を受け取った。それには、一足先に入山し屏風岩攻撃までの間、涸沢で八高山岳部の合宿に加わっていること、および屏風のための